第７４回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号３番　北海道小樽桜陽高等学校（後志支部）

「記憶の間」 作：小樽桜陽高校演劇部（生徒顧問創作）

静かに緞帳が上がると、舞台は暗いまま。その闇を照らすスマホの小さなライト。その光が恐る恐る舞台中央へと進む中、空間がじわりと青く染まり観客の恐怖をさらに煽る。そして、スマホを持った鈴七と秋斗を謎の着ぐるみを着た人物たちが驚かせたところで、やっと空間は明るくなる。

鈴七と秋斗を驚かせた3人は演劇部員。「呪いの部屋」と恐れられるようになってしまった演劇部室で物語は進んでいく。演劇部員の３人が色とりどりの照明でダンスパフォーマンスを披露したり、鈴七と秋斗をマダムと執事に変身させてだんだんその気にさせていくなど、「何でも自由に演じられる」、「自分を変えられる」といった演劇の魅力がたっぷり詰め込まれていると感じられた。

物語終盤になると、周りから仲間はずれにされてしまっていた鈴七が演劇部を通して自分に自信をつけ、仲間外れにした女子生徒を「呪いの部屋」である演劇部室で怖がらせることに成功する。新たな自分を見つけた鈴七たちは演劇部員の３人に感謝を伝え、「また来ます」と言って部室を去っていく。しかし残った部員３人は、はっきりとした返答をすることもなく、身を寄せ合って泣き始めるのだ。このシーンから、実はこの３人は幽霊で、鈴七と秋斗の２人にもう会えないことに悲しんで泣いたのではないかという意見や、神様によって作られた精霊であり愛する演劇を伝えられた安堵感で泣いたのではないかという意見、さらには神様が見ていた記憶を神様が鈴七と秋斗に見せていた……など、存在や物語に関する様々な見方や解釈が私たちの中に生まれていった。

最後に（翌日）、鈴七と秋斗が訪れた演劇部室の空間には、何も、誰も残っていなかった。唯一残っていたのは神様（ぬいぐるみ）。鈴七はそれを抱きしめる。そして秋斗とともに、感謝の気持ちがこもったような、深くて長いお辞儀をして部屋を後にする。

あらためてタイトルにある「記憶」とはなんだろうか。前のシーンで部長は「”あのとき”のことを思い出すよね」と言っていた。結局”あのとき”が指す内容は、明確にはわからないまま終幕した。これについても、演劇部員３人はじつは過去にも悩みを解決したり手助けしたりしようとしていたが、成功に終わらず、部室で起こった現象が不思議なものと捉えられ、噂や呪いとなって話が出回ってしまったのではないか。だから今回の件で後輩を助けられ、現実の世界に心残りがなくなって消えたのではないかといった意見が出た。多くを語らずに終わることによって、ここでも観客の想像がさまざま膨らみ、充実した物語の余韻を味わうことができたのではないだろうか。

コミカルとシリアスを上手く融合させ、観客の自由な想像でさらに物語が広がっていく、とても楽しい劇であった。